

「主イエスは生きておられます」

ルカによる福音書 24章 13-27節

森島 牧人 牧師

我々キリスト者にとって「十字架と復活」は福音であると同時に生活の基本をなすものです。十字架によって罪赦され、復活によって新しい命を授けられた我々はこの両方の出来事をバランスよく理解する必要があると思われまふ。

その一つ「復活」は奇跡の中の奇跡とされ、我々キリスト者にとっても理解するのは難しいのですが、日本人がキリスト教と向かい合う時、この復活が躓きとなっているのは確かなことです。しかしこれは信仰上の教理を科学的方法によって理解しようとするからであって、聖書の問題は聖書自身の光りに照らして解釈されるべきなのです。今日与えられた「エマオ途上の顕現」という物語はその最も良い例と言えます。

さて、主イエスの死から三日目、失望落胆し、悲しみに暮れながらエルサレムを出てエマオという村へ急ぐ二人の弟子がいました。一人はクレオパ、もう一人はこの福音書の記者ルカであろうと言われていふ。聖書は「二人の弟子が・・・この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」(ルカ 24:13-15)と始まります。悲しんでいる弟子たちに主が御自分から近づいて行かれるこの美しい場面は、山上での説教、「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」を思い出させます。しかし二人はその人が主イエスだとは気づきませんでした。この事は現在にも言えることで、今ここに復活の主がおられたとして、信仰の目で主を認めることの出来る人がどれだけいるか…。

道連れとなった旅人から何を話していたのですかと問われたクレオパは「ナザレのイエスのことです。この方は・・・行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、祭司長たちや議員たちは、・・・十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。」(同 24:19-21)と答えます。それとは知らずに彼は主イエス本人に向かって自分のイエス観、すなわちイエスはナザレ出身の預言者であり、自分たちが期待していた民を解放するメシアではなかったかと告げたのです。主イエスの、「苦難の僕」としての真のメシアの在り方などまったく理解していなかったのです。そして続けて、その日の早朝、仲間の女たちが主イエスの墓へ行ったこと、しかし墓に主イエスの遺骸はなく、天使たちが現れ、「イエスは生きておられる」と告げたことなど、伝聞による不確かな情報として話したのです。

これを聞いて主イエスは「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」(同 24:25・26)と二人を叱責されます。かつての彼らが信仰をもち、祈りをもって主イエスと生活を共にしていたとしたら、主イエスのく十字架の苦しみから復活の栄光への飛躍を理解出来たはずだったからです。主イエスの二人へのこの叱責は、あらゆる時代のあらゆるキリスト者に向けられたものと思われまふ。主は今も我々に真意を指し示し、我々が理解するに至るまで懇切に導いてくださっているのです。

この後聖書は、エマオに近づいた二人が先へ行こうとされる主イエスに「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って無理に引き止める場面となります。その人が主だとは思っていなかった二人の、復活の主への無限の意味を持つこの美しい呼びかけは、今までどれほど多くの寂しい魂を慰めて来たことだったでしょう。続いて聖書には主イエスが二人と共に宿に入られたとあり、「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」(同 24:30・31)と続いています。パンを取って渡してくださいその人の一連の動作、それは彼らがガリラヤ湖畔で見慣れていた主イエス独特の身振りそのものだったからです。この時、魂の目を開かれた二人は旅人が復活の主イエスであることを認めることが出来たのです。

聖書にはそれと同時に主イエスの姿は見えなくなったとあります。それは復活の目的が果たされたからで、無限の慰めと喜びに満たされた二人は「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合います(同 24:32)。その人が語りかけ、聖書を解き明かしてくれた時に二人が感じた内から燃え上がるような感激、それは復活の主との交わりによって生じるものだったのです。

(説教要約 羽入田悦子)